

Nara Women's University

【内容の要旨及び審査の結果の要旨】 争異と沈黙
-リオタールにおける「文の哲学」についての倫理学的研究-

メタデータ	言語: 出版者: 公開日: 2009-12-24 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 藤井,薫, 杉峰,英憲, 柳澤,有吾, 功刀,俊雄, 伊藤,一也 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10935/1141

氏名(本籍)	藤井 薫 (東京都)
学位の種類	博士(学術)
学位記番号	博課第407号
学位授与年月日	平成21年3月24日
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当 人間文化研究科
論文題目	争異と沈黙 ーリオータルにおける「文の哲学」についての倫理学的研究ー
論文審査委員	(委員長) 教授 杉峰英憲 准教授 柳澤有吾 教授 功刀俊雄 准教授 伊藤一也

論文内容の要旨

本研究の主題はJ.-F.リオータルが論じた「文の哲学」を倫理という観点から解明し、彼の倫理思想を明示すると同時に、その可能性について検討することにある。

第1章では、リオタルの思想の要をなす「方法」が成立していく道筋を跡付けた。『ポストモダンの条件』では、社会システムの中での情報の流れと自己の変容との関係が明らかにされ、流動性を前提とした「社会」で求められる知の条件が問われることになる。その際、情報を制御するための知だけではなく、社会の価値を差異化する原動力となる「パラロジー」に本来的な価値が求められる。そこから「パラロジー」を汲み上げるものとしての言語ゲームの方法論的重要性が論じられる。差異化の原動力ともなる「方法」としての言語ゲームが、『争異』における「文の哲学」へと展開されていく過程が跡付けられている。

第2章では、「他者の苦悩」への関心の延長線上にあるものとして、アウシュヴィッツにおける「犠牲者の沈黙」の問題が取り上げられる。リオータルは犠牲者が過去の体験に関して「沈黙」してしまうことを議論の端緒とし、その「沈黙」がいかにして「証言」へと開かれうるかという問いを言語の生成原理にまで遡って論じている。「アウシュヴィッツ」はひとつの「固有名」として言語哲学的に捉え直され、世界を「文」の連鎖と考える「文の哲学」との関連において論じ直される。固有名は「文」のネットワークの結び目の役割を果たし、「文」の連鎖によって紡がれる物語は、共同性の生成基盤ともなる。「文」が一定の形で相互に呼応しつつ連鎖するという関係が存立していなければそもそも何らかの規範が成立したり維持されたりすることもありえないが、しかし特定の共同体が有

する固有の規範は、その文の連鎖の形式自体が障壁となって、その「外」へ、普遍性へと開けていく契機を見出せない。このアポリアを前にして、共同体を閉鎖的なかたちで固定化してしまうような規範のあり方を乗り越えて他者との対話を可能にするためには、「文」の通常の連鎖の仕方を揺るがすような「文の動き」が重要だということが論じられる。

苦悩する他者が共同体に受容される契機として重要なのは、理性偏重主義に陥ることなく、他者の苦悩に向き合い、人間の行為や発話（あるいは沈黙）、エクリチュールといったものを取り巻く感情のうちなる「文」を汲み上げることだとリオタールは論じた。犠牲者は、「沈黙」を抱えるというその事実によって他者に呼びかけ、また呼びかけられる。「文の哲学」の観点から見れば、この呼応関係は、まず言語共同体が保持する物語を介して基盤が与えられる。その中で特殊性は、普遍性に対し常に抵抗関係にあるわけではない。むしろ、呼応可能性の広がりの中で特殊性は変容の契機を得るのである。

この問題との関連で、第3章では、「小さな物語」と「大きな物語」を構造的連関において捉えるリオタールの視点が示される。「大きな物語」の否定、「小さな物語」の擁護という単純な二項対立で考えるのではなく、「小さな物語」として語られる各々のテーマの独自の規則に目を向け、単なる統合や包摂を超えた仕方的思考することから、新たな普遍性が開示されるのではないかと論じた。

第4章では、「文の哲学」をもとに、リオタールのハイデッガー論を中心に、アウシュヴィッツにおける「他者の廃棄」の様態が、ハイデッガーの政治実践の過ちという観点から考察される。『争異』において考察の根本的契機となった「犠牲者の沈黙」は、『ハイデッガーとユダヤ人』における「ユダヤ人」の問題へと継承される。リオタールは、ハイデッガーの思考の中にある「忘却以前の忘却」—過去の行為に対する抑圧的忘却—を指摘した。本章ではこの「忘却」と「ユダヤ人」との関係が明らかにされる。「ユダヤ人」は常に、西欧において、影のような人々であり、忘却された対象であったといえる。その意味で、欧州における「反ユダヤ主義」は、既得権保持者である広義のキリスト教信仰層の無意識的不安が行為化されたものであるという彼の見解を明らかにした。政治的抑圧により憎悪と暴力の「負の連鎖」が生じ、反復的に社会問題となって現われることになる。人間が抑圧によって抱える心性に適切な通路を確保する事が重要であると指摘し、「忘却」に対して「エクリチュール」が果たす役割を強調した。

第5章では、引き続き、所謂「ハイデッガー問題」に即して、「全体主義」と「われわれ」の問題が主題化される。ハイデッガーは解釈学的に自らの思考を閉じて「沈黙」を保ち、それと同時に、閉じた思考の外部を自らが棄却していることも「忘却」の彼方へと押しやった。「ユダヤ人」の見えない絆を支えているものが〈法〉であるとすれば、それは存在を問うような思考様式には理解しがたい〈法〉であるだろう。その〈法〉を「忘却」し、語る術をもたないことによる「沈黙」こそが「殲滅」そのものだとリオタールは結論付けた。

全体主義はまた共和主義とも無縁ではない。「われわれ」のアイデンティティ、「われわれ」の根拠

についての不確実性ゆえに、それは〈神話的起源〉を利用する全体主義とも結びつきうる。しかしながら、それに抗してなお「われわれ」と語る可能性についてリオタールが示唆している点も見逃せない。不可視化されてしまうものに対する感受性と、「われわれ」の根底にあるものを繰り返し問い直すようとする強靱な反省的思考こそが、リオタールが積極的な意味で呼びかける「われわれ」の内実をなすものであり、彼の倫理的思考の核をなすものである。

論文審査の結果の要旨

本論文は、J.-F.リオタールの思想をとくにその倫理的側面に焦点を合わせて考察したものである。リオタールの名は「ポスト・モダン」という言葉とともに知られるようになったが、わが国においては、彼自身の思想がその内実に立ち入って論じられることはなく、紹介すらこれまで十分になされてこなかったのが実情である。「ポスト・モダンの旗手」といわれ、翻訳もそれなりになされているが、リオタールの思想に関する本格的な論文は数えるほどしかなく、彼の名を冠した本格的な研究書に至っては一、二の翻訳書を別にすれば一冊も刊行されていないという事実がその状況を如実に物語っている。

本論文では、欧米の文献にも目配りしながら、日本における議論のこうした真空状態に果敢に切り込んだものであり、まずその点を高く評価できる。従来の議論が、『ポスト・モダンの条件』や崇高論などの美学的著作に偏っていたのに対して、ここではリオタールの主著といってよい『争異』がその続編ともいえるべき『ハイデッガーとユダヤ人』とともに仔細に検討されており、リオタール哲学の真髄がはじめて論じられたといっても過言ではない。細部に関しては部分的に議論が荒くなっているように見える箇所もないわけではないが、先駆的な仕事においては避けられない欠点であり、この論文の価値を損なうものではない。

本論文は大きく二つの部分から構成されており、前半は『争異』において本格的に展開されることになる「文の哲学」が形成されていく歩みに焦点を合わせている。

第1章では『ポスト・モダンの条件』が扱われているが、知の正当化における「パラロジ」に注目している点が特色である。この著作を通して読めば、「ポスト・モダン時代の科学」と「パラロジによる正当化」をめぐる議論の重要性は明らかなのだが、物語論が持ち上げられるなか、これまで光が当てられることは少なかった。リオタールはパラロジを単なる誤謬推理として片付けるのではなく、言語行為論における差異化の活動、言語ゲームにおけるひとつの「手」として捉え直した。そこからパラロジによる差異のモデルが、安定したシステムに対するアンチモデルとして、社会システム再編の契機となることが明らかにされている。

この差異のモデルをめぐる議論は、言語ゲームの複数性、通約不可能性の問題へと受け継がれ、『争異』において明確に「文の哲学」として展開されることになる。この「文の哲学」の構造と含意は第1章の後半において論じられているが、それが概念的なレベルの抽象的議論に終始するのではなく、軍事政権下での人権侵害などを調査・分析する「真実委員会」の試みと関連付けられている点が注目される。

本論文の特長のひとつは、随所で現代社会の問題と関連付けられる形でリオタールの議論が分かりやすく説明されていることである。そのつどの時代状況と切り結ぶかたちで思索を深めていったリオタールを論じるにふさわしいアプローチの仕方であるとともに、リオタール特有のジャーゴンに囚われてしまう危険性を免れるひとつの方法としても評価できる。

具体例に即して「文の哲学」の基本的構造が示された後、「係争」に対する「争異」など、鍵となる概念を考察するのが第2章である。対立しあう者のあいだに共通の地盤が認められる「係争」に対して、「争異」の場合には双方に適用できるような共通の規則が存在せず、両者を分かち深淵があらわになる。しかし問題は単なる断絶ではない。ここでのリオタールの視線の先には常にアウシュヴィッツがあるのだが、アウシュヴィッツからその実在性を奪おうとする歴史修正主義者の声高な議論とは対照的に、生き残った犠牲者のほうは「沈黙」へと追いやられている。リオタールはその「沈黙」をさらに分節化し、分析してみせることによって、伝達や表現をなしえず自らの言語からも疎外される犠牲者たちの姿を浮かび上がらせる。その議論を巧みに再構成しているだけでなく、「争異」を可能にする構造にまで遡って考察を加えていることが本論文の特長であり功績である。すなわち、衝突が衝突として現象することもないような根本的な「ずれ」がそこにあるのだとしたら、断絶とすらいえない「争異」なるものはそもそもいかにして起こりうるのか。この疑問に答えを与えるのが第2章の固有名論であり、固有名をめぐる言語哲学的な議論を「争異」論と関連付け、文の連鎖の仕組みと固有名との関係を明らかにすることによって、固有名としての「アウシュヴィッツ」が意味するものを探り出そうとするものである。

固有名の未規定性が複数の意味を呼び寄せることによって生じる「争異」は、文の連鎖のうちにひとつの「動き」をもたらすものであり、既成秩序の外部へと開く道であるとする考え方は、『ポスト・モダンの条件』における「パラロジー」の議論の延長線上にあるものだが、出来事とその証人をめぐる「応答」の義務を描き出したものと解することもできる。つづく第3章が主題化するのはこの「応答」、とりわけ、他者の苦悩に向き合い、「文」になることを求めている沈黙を「文」へともたらすことである。

ここでは、レヴィナスの他者論やカントの反省的判断力をめぐる議論、さらには1789年のフランス人権宣言の規範的正当化における逆説など、リオタールが縦横無尽に展開する錯綜した議論と格闘しつつその含意を明らかにしようと試みており、幅広い研究の跡が伺われる箇所である。また、規範の基礎を探りつつ普遍と特殊の関係を論じることを通して、「大きな物語」と「小さな物語」の解釈を一新している点も特筆に値する。

論文の後半をなす第4章および第5章では、かの「犠牲者の沈黙」の問題をさらに深め、「ユダヤ人」という概念に結晶させた著作『ハイデッガーとユダヤ人』へと考察の場を移している。

「ユダヤ的」なものとは、共同体の盲目的なナルシズムを批判するものであり、「存在」に定位

したハイデッガーの思索が忘却している〈法〉の思想や、フロイトの言う「無意識的情動」と関連付けられている。そして、そのようにして抑圧され排除されたものを取り戻そうとする不断の試みとしての「エクリチュール」に光が当てられる。ここではハイデッガーの政治的「沈黙」の理由が、存在の思考とその「外部」あるいは「別の知」との関係の問題として捉えなおされ、リオタールが一貫して「異質なもの」あるいは「他者」との関係を問い続けていたことが明らかにされている。

最後に、「われわれ」とは何かという問いとともに「全体主義」に関するリオタールの議論が取り上げられる。ここで筆者は、リオタールがさりげなく一つの文章に織り込んだ（積極的な意味での）「われわれ」の概念を丹念に掬い上げ、あらためて、抑圧され・不可視化されたものへの感受性と反省的思考の重要性をそこに読み取っている。

以上のように、「パラロジー」、「文の哲学」、「沈黙」、「ユダヤ人」、「忘却」、そして「われわれ」など、これまで十分に論じられることのなかったリオタール哲学の核心に迫る内容にあふれた論文であり、その高密度の論述ゆえに個々の議論を細部にいたるまで詰める作業に関しては課題を残す部分もあるが、この分野におけるきわめて重要な成果であると判断される。

なお、本論文提出者は博士後期課程進学後に専門分野を変更したため、成果を挙げるのに若干の時間は要したものの、査読つき学会誌である『倫理学研究』（第36号、2006年）に掲載された論文のほか、科学研究費補助金によるプロジェクト「自己知と自己決定」参加の成果となる論文（報告集に掲載、2007年）および『人間文化研究科年報』（第22号、2006年）掲載論文と合わせて3本の論文を公にしている。また、日本倫理学会をはじめとして学会発表や各種研究会での発表も積極的に行っている。以上の研究成果は人間行動科学講座の学位取得基準も満たしている。よって、本論文は、奈良女子大学博士（学術）の学位を授与されるに十分な内容を有していると判断した。